

わらを作るのである。簡単な、二本足の道具で、すだれのようなものを編むわけであるが、私は縄ない組だったので、たわらを編むのは、とてもむづかしいことに見えた。



まにあわせの道具、まにあわせの衣類、まにあわせの食事、で育ったのであるが、それを何と感ずることもな

力の足りない子ども達が作
った炭だわらは、ほんとうに
役に立ったのであろうか。
その時の縄ないは、戦後、
わらぞうりを編むのに役に立
ったが、子どもの作ったぞう
りは、一日で切れることもあ
った。母は、ほろ布をさいて
ぞうりに編み込んで強くした。
他に履く物もなかったもので、
そのぞうりで雨の日には、頭
まで泥はねをあげて、ぬかる
みを走った。

く、意欲も信念もなく、ただ生きる方便をだけ、考えてきた、とでも言えばよいのであろうか。

柿の葉が、今年は、ほんとうに、まっ赤に紅葉した。まだほとんど散つてもいないのに、木全体がこのように赤く染まつたのは、めずらしい。＼まっ赤な秋にかこまれている＼という歌そのままの秋である。

湯

水

一寺の秋

(10) 1

十一月十四日。台風が来ないまま、雨の少ない季節にはいったので、琵琶湖の水位は下がるばかり。洗濯（あらいぜき）はほとんど流れをとめられて、川底が乾いているのを、テレビで何度も見る。唐橋のあたりでも、和船が水のなくなった土の上に座りこんでいる。

庭は、桐の葉がすっかり落ちて、明るくなったが、空に向かって槍を突き出したような枝が、とても手もちぶさたで、ひっこみのつかない様子をしている。

よめなの花が頃を過ぎ、うす紫の花びらを、いっぱいの開きすぎて、骨ばかりのじゃのめ傘のようになった。地面をおおうように咲き盛り、夕暮れには、雪のように浮かびあがった花たちを、根もとから切り取ってしまうと、庭が少しづつ枯れ色に変ってくる。

門をはいったところに、桜が一本ある。春には八重の花が下を向いて重そうに咲く。ひかえめのピンクで、花一つ見れば、かんざしにしたいように美しいのだけれど、木全体は、染井吉野やしだれ桜のようにはなやかでは

ない。よく見れば美しいのに、全体の姿が美しく見えない。こまかく見るより、全体がぱっと美しい姿のものは、花でも人でも、ほむべきものである。しかし、よく見て美しければ、それも捨てがたいのである。

裏へまわって墓地へ行くと、まっ黒の猫がいた。逃げようとしないので、おどかさうと思つて、石をほうった。投げたのではなくて、ほうったことを、猫はちゃんと知つていて、ころがる石を追いかけて、前足で押して遊んでいる。

かわいがられて育つて、まだ、けいかいすることを、知らないのだろうか。人の悪意も、それを通させようとしない素直さは、思わず笑つてしまふけれど、押しつけがましく、無神経でかなしい。

琵琶湖の水位がマイナス79センチまで下がった。私は滋賀県人だから、琵琶湖に対する関心は強い。時々、瀬田川の増水の夢を見る。川畔を通学した学生時代には、あの川底で、人魚のように静かに、ねむりたいと思つた。

(一九八四年・カット 原田道子)

ネ ム の 木

1985 7 2

原田 憲雄

竹林に鉄を鍛える稽叔夜先生が／舎前に植えたのは／カンシヤク玉をいつも／そっと包んでくれるからだつた／賢者の憤怒とは聞こえぬ／などとは尤もらしいが／聡明なればこそすえかねる／腹があらうというものだ／市隱碧岬大人がカンシヤクの／爆竹を打ちあげるのを／はじめて見たのがほかならぬ／おまえと対した涼軒の／傾いた関牀においてであつた／なにが原因だつたのか／いまでは記憶もおぼろになつた／その時だつたぶん分りはしなかつた／機嫌をなおした大人は／おまえに／浜木綿と楊柳の苗を添え／贈るといふ／酔つてふらふら／雨し

ぶくながいながい道をかえった／瘠土にも耐えると大人は保証した／陋屋の庭で／童女の指にさわられ／うなだ
れて葉を閉じた／光を浴び／たのしげに葉をひらき風にそよいだ／童女が成長するころ／姍姍と朱柯をおおい／
駢駢たる花を青天にかかげるだろう／そのとき大人夫妻を招じ／木蔭で茶でもくみたいものだ／ある日はがきが
告げた／大人が禅院で病を養うと／からだはどこもわるくない／老いてひよっこり背負った重荷／のせいなのさ
／大人はつぶやき／劉生えがくところだね／とわたしに伴なり童女をほめた／楊柳は根つき／浜木綿は緑をのべ
たがおまえは／しおれはじめた／暮れには葉を閉じるゆえ／夜合とも合昏とも／合歓とも／ひとは愛称讚嘆する
／触れもせぬのに昼も閉じうち臥す／さまは傷ましい／呼んだ驢駝は手をこまぬき／つぶやいた神があまりに愛
するらしい／碧岬居から双魚いたる／小康婦臥／ところで彼女の消息如何／慚汗しとど／礼にならわぬ野人の顛
狂／ついに謝すべき辞を知らず／無音をかさねた／晩夏／なお大人は迂愚をあわれみ／音問再度／待ちまちで一
つ咲きたるねむの花／こたえた駄句とはうらはらに／おまえはもう枯死していた／浜木綿もまた／楊柳もまた／
萱草は憂いを忘れさせ／おまえは怒りを解く／という／爾ノ根ハ深く且ツ固ク／余ガ宅ハ浅クシテ跨ル／晉ひと
もまた移植の／難きをなげいた／三径なき庭に五柳は育たず／迷惑顛倒の心田には菩提の種子も生じない／ほう
ほう十年／童女は少女となり／大人は道山に帰った／瘠土の庭／はなお瘠土／やぶれた軒をおおい／駢駢と日に
かがやき姍姍と風にゆれる／まほろしの花

*琴座第二八四号惠投多謝。碧翁は宋代の隨筆に見えるのが早い例のようです。青翁という語は中国の詩文には見かけぬようですが、わが国で普及すれば貴句がその典故ということになりましょう。薄氷の妄語虚空は翁なり、の句おもしろく。なお、古道人の名で知られる文人画家福田静処に碧翁の別号があるようです。六月念日。286

*二八六号、古瀬戸花瓶についての尊文、興味をもつて拝誦。あの瓶に、丈高く、たつぶり、花を生けこむためには、瓶そのものが、よほどの重さを持たなければならぬはずですから、その重さは「技術未到」ではなく、その必要を計量した陶工の智慧のあらわれではありませんまいか。現代の花瓶はみずがらの美を示すに忙しい様ですが、むかしの花瓶は、おのれの盛るべき花を、その花を捧げるべき仏を、まず念じて、おのれの形を定めたように感ぜられます。貴文のいわゆる「拙なさ」とは、仏に捧げる花の重さを支えるために、おのれの美を忘れた、瓶の謙虚さを、さしておられるのであろうかと推察しました。もともと、陶器についてもまた、ほとんど全く無知ですから、愚感は実際から遠く隔っているかもしれません。ご文安を念じあげます。八月初六。287

*第二八八号を頂きありがとうございます。この冊では「百済々青牛和尚の「角もある風の形のみなえし」に目がとまつたら心がそこから動かなくなりまし。お礼まで。十月十三日。289

*第二八九号見惠深謝。「遠山に日の当りたる枯野かな」についてのご批評三誦。少年のころ唐突し、この一句があれば他はいらぬ気がし、以来、虚子を読んだことがあります。道ばたで見かける石地蔵に片手をあげておがんで通るように、出会ったときほつとし、あとは忘れていきます。先日、ある日本画展にゆきましたら、仏や神を描いた絵がたいへん多いのに、仏も神もおられません。ふしぎなようでもあり、あたりまえのようでも

ありました。十一月七日。290

*第二九〇号、尊文「起」の、酒豪老人の割腹自殺と碧梧桐の桃の句が結びつくところに、詩人耕衣の諸行無常を感じました。さらに正法眼蔵梅華に結びつくところに、諸行無常の諸行無常を。十二月十七日。291

*第二九一号恵投多謝。「作者というものは、心の奥の方でこのような微妙なゆらぎを秘蔵していて、何れでもよいから何れとも決しかねるといふ、ある自由未決の快感を無意識にも持続しているのではあるまいか」といふモズ語へ耕衣文へ深く共鳴いたしました。読者にもまた、恐らくその快感があつて、わたしの無意識裡では、冷位四十八の第三句と第七句とが執着分離し「金色の憂き人際を酢蓮根」となり、輝いたり消えたりしています。頂上にもう一步といふところまでたどりつくとなんと転落してしまいたくなく墮落してしまふ下根の夢かもしれません。二月五日。292

*第二九三号、尊文「野」を読んで、李賀の「野歌へ引文省略」を想起し、また「十二月楽辞正月」の「薄薄たる淡羅野姿を弄す」の語を思い浮かべました。「祖堂集」から引かれた鳥窠和尚と賀と同時の人であること、単なる偶然にすぎませんが、面白いことでした。四月初六。294

*脚のグラグラの床几、蚊を追つ払うためにバタバタ使う団扇などの涼み台についてのモズ語を読んでいるうちに、わたしも十歳前後のことを思い出しました。織屋に囲まれた西陣ですが、十分も歩けば田畑があり、夕方にはどの家の前にも涼み台が出ていて、線香花火が闇を涼しく色どっていました。あのような光景は、わたしの中でも、夢二の絵や、井月の句に接する時にだけ帰ってくるのでしょうか。七月十日。297

涙でぬれた衣の袖に紅おしろいがべったり／送別の陽関曲を／うたっていたいただきました千べん万べん／長い山路と人のいったその山も絶え／さめざめふる雨をひとり旅館で聞いています／別れを惜しみかなしくて心は乱れ／忘れました旅立ちに／かわした杯の深さ浅さも／どうぞ便りを雁がねにことずけてくださいな／東萊は蓬萊ほどに速くはないのです

双調、六十字、前後段各五句、四仄韻。一本には題を「晚止昌樂館寄姉妹」(夕方、昌樂の旅館にとまって、姉妹にあてて)とする。昌樂は今の山東省昌樂で、益都の東二五キロ。昌樂からさらに東北に一〇〇キロのところに掖県がある。益都は宋代の青州で李清照の夫趙明誠の故郷、掖県は萊州で、一一二一年前後に明誠がそのこの長官として赴任したらしい。この詞は青州から萊州への旅中の作だろう、といわれる。明誠の父がなくなつてもなく、明誠兄弟は、官界から追われ、故郷青州に退居した。官僚としてはつらいことだが、学問の好きな明誠と清照には、むしろ楽しい閑静な十数年が続いた。陶淵明の「帰去来の辞」にちなんで「帰來堂」と名づけたその書齋での生活の一コマを彼女は「金石録後序」に描く。

わたしは、生れつき記憶力にすぐれていた。いつも食事がおわると、帰來堂に座つて茶をわかし、うずだかく積まれた書物を指さし、「これこれの事は何という本の第何巻、何ページの第何行に出ているか」という当てくらべをし、それでお茶を飲むあとさきをきめる。当つて茶わんをとりあげ大笑いしたら、茶がふところこぼれ、

かえって飲めなくなつた。こんな楽しさの中で老いえたら満足だつた。

世間的な出世や物質的な貧しさは氣にならなかつた、という言葉は、彼女の場合、ほとんど掛け値なしに受けとれる。夫の再就職は、その「楽しさ」との別離だつた。

涙溼羅衣脂粉滿。

Lèi shī luóyī zhīfěn mǎn.

涙が薄絹の衣をぬらし、その上に紅やおしろいがいっぱいついた。女の旅立ちの描写としては、あたりまえの表現だろうが、この一句、まさまさと湿つた紅やおしろいの匂いさえして、そこに集うた彼女の姉妹のおもかげもほうふつと浮かびたつ。さきに李清照の出身地を山東済南の歷城といつたが、ちかごろ彼女の父李格非撰「廉先生序」によつて、歷城より四五キロ東の章丘県明水鎮だとする説が出た（于中航「廉先生序」石刻考釈）一九八四年五月、など）。明水は青州の西約八〇キロ、当時、李氏の家がやはり明水にあつたとすれば、清照は時々帰省し、姉妹が清照を訪うこともあつたかもしれぬ。一般に結婚した後は婦人の帰省はむづかしい、とされてはいるが、個々の例外はあろう。また、趙・李両家は新・旧の党に分れたから、男達は交通を避けても、女はかえつてその遠慮なしに行き来したかもしれぬ。ことに明誠隠居の十年には、あるいはこのとき、明誠だけ先に任地に向かい、清照は実家にかえり、そこでの別れがこの詞にうたわれているのかもしれない。

四疊陽關，

Sìdié yángguān.

唱到千千遍。

chàngdào qiānqiān biàn.

「四疊陽關」は王維の「元二が安西に使用するを送る」詩。あまりにも有名だから引くまでもないだろう。この

詩は、たぶん作者の生前すでに、送別の曲として、いまの「螢の光」のように、うたわれ、末句の「西、陽関を
出づれば故人無からん」あるいはその「故人無からん」を幾たびもリフレンとしてくりかえしたので「四疊」と
いう。くりかえしの数え方に諸説あるが、ここにはかかわらぬ。「千千遍」は詩的誇張だが、*chāngdào qiānqiān*
*biàn*の音調には美感がこもる。

人道山長山又斷。

Rén dào shān cháng shān yòu duàn.

送る人たちはいった、これからさきは長い長い山路だと。だが、その道はあなたがたとつながっていた。だの
にその山路さえきれてしまった。「西、陽関を出づれば故人無からん」が、その形を全く思い出させぬ姿に歌い
かえられている。

蕭蕭微雨聞孤館。

Xiāoxiāo wēiyǔ wén gūguǎn.

「蕭蕭」は一本に「瀟瀟」とする。音義ともに同じ。ただ『詩經』に「風雨瀟瀟」とあり「雨風ざやざや、に
わとりコケッコ、殿御にあえたら、なくさめらりよに」の意。それを響かせたのなら「瀟瀟」の方がいいことに
もなりそうだが、作者が女性だから「殿御」にあてては、後の朱子の説のように、みだらな歌ととられかねず、
まして姉妹にあてた詞ゆえ「瀟瀟」をことさらに避けたのかもしれない。「聞」は聴こうとしないのに耳にはいつ
てくる。

四つの韻字のうち、瀟、斷、館は上声早韻で、重く、たゆとう響きをもつ。その響きが各々の句の意味をなん
とゆたかに内面で支えていることだろう。そうして「遍」字。これは去声の霰韻。早韻の文字と通用するが、そ

の違いを計算してここに使ったことは疑えない。ここまでが前段。

惜別傷離方寸亂。

Xībīe shānglí fāngcùn luàn.

忘了臨行，

Wàngle línxíng,

酒盞深和淺。

Jiǔzhǎn shēn hé qiǎn.

「惜別傷離」は惜別離難わかれをおしむ。ただこの方が千々に乱れる「方寸」ところのさまとしてよりふさわしい。「忘了」わすれてしまった、は次の句の「深和浅」深さと浅さ、にかかる。さかずきにくんだ酒の深さと浅さ、送る人の心ざしのそれにたぐえること、いうまでもない。そちらの愛情がどのようなであれ、あなたがたとの別れはかなしかった。「不記臨分多少話」分れるときどれほどの話をしたかおぼえていない、の句が晏幾道の詞にあるらしい。これを三句に分散した趣きだが、晏氏のは男の無口な、清照のは女のこまごました感情の表出として、それぞれにおもしろい。

好把音書憑過雁。

Hǎobǎ yīnshū píng guòyàn.

東萊不似蓬萊遠。

Dōnglái búshì pénglái yuǎn.

手紙を、ください。わたしの行き先は漢代に東萊郡といわれた萊州。それは東の海の向こうにあるといわれる神山の蓬萊のように、とどくあてもないところじゃないんだから。

後段の韻字は乱(翰)、浅(銃)、雁(諫)、遠(院)で、それぞれ()内の文字を代表とする部に属する。これまた、通用するが早韻とは異なる。前段の早韻でふんだ句の重さをきわだたせるために、ここでは注意ぶかく

その韻の文字を使用しなかつた。ありふれたことばを使い、あるいは先人の句をちよつと直して組みたてたように見える場合でも、彼女の詞が、人の心にしみこみ、離れがたく感じさせるのは、聴覚に訴える工夫がずばぬけていたからではないか。このような機微を、ただちに感覚として味わいうる中国の詩人や、音韻の学にくわしい学者が、われわれにも分かるように説き明かしてくださるとうれしいのだが。

(一九八五年七月十八日)

※前号正誤 16頁13行 遇然↓偶然 18頁8行 弟手↓弟子

マ ハー マ テイ

ーランカーの岸辺で

(九) ー

原 田 憲 雄

大きなピク団と大きなボサツ群がいつしよだった。種々の他方の仏国土から来集したこれら諸ボサツはみな、無量の自在・三昧・神通の力をそなえ、自由にたのしんだ。五法・自性・二種無我に精通したマハーマテイをリーダーとする者に、一切の諸仏は、手により灌頂し、仏位に到達したことを証明した。その仏位はへみずからの心が対象領域を作りあげる、その意義をよくさとり、種々の衆生には種々の心と形があり、種々の心にしたがい種々に思念を異にする。だから無量の濟度の門をひらき、濟度すべき相手に応じ、その見方にしたがつてあまねく化現する。

魏訳「与大比丘僧。及大菩薩衆。皆從種種他方仏土。俱來集會。是諸菩薩。具足無量自在三昧神通之力。奮迅遊化。五法自性二種無我。究竟通達。大慧菩薩摩訶薩。而為上首。一切諸仏。手灌其頂。而授仏位。自心為境。

善解其義。種種衆生。種種心色。隨種種心。種種異念。無量度門。隨所応度。隨所応見。而為普現。」

宋訳「与大比丘衆。及大菩薩衆俱。從彼種種異仏利來。是諸菩薩摩訶薩。無量三昧自在之力。神通遊戲。大慧菩薩摩訶薩。而為上首。一切諸仏。手灌其頂。自心現境界。善解其義。種種衆生。種種心色。無量度門。隨類普現。於五法自性識二種無我。究竟通達。」

唐訳「与大比丘衆。及大菩薩衆俱。其菩薩摩訶薩。悉已通達。五法三性諸識無我。善知境界。自心現義。遊戲無量自在三昧神通諸力。隨衆生心。現種種形。方便調伏。一切諸仏。手灌其頂。皆從種種諸仏国土。而來此會。大慧菩薩摩訶薩。為其上首。」

ここは、楞伽經全体の要約というべき重要なところだから、重箱の隅をつつくようなせんさくを、いとわずにやっておこう。漢訳三本は右に掲げた。これを次に引く梵本とつきあわせてみよう。

mahatā bhīksusamghena sārḍham mahatā ca bodhisattvaganena (,) nānā buddhakṣetra samnipātitair bodhi -
sattvairmahāsattvair aneka samādhi vasīta balābhi jñā vikṛditair (,) Mahāmātibodhisattva pūrvangamair
sarva buddha pañyabhisekābhīksikṛtair (,) svacitta dr̥ṣya gocara pari jñānārtha kuśalair nānā sattva
citta caritra rūpa naya vinaya dharibhiḥ pañcadharma svabhāva vi jñāna nairātmyāvaya gatiṅgatair.

漢訳三本のうち、右の梵文にほとんど一致するのが宋訳で、魏訳と唐訳は、句の入れ変わったところがある。しかし魏訳の方が梵文に近い。梵文を分析しながら、三本を検討しよう。

mahatāはmahat (大きい)の単数具格。大きいは価値・空間の形容で、ここではそのどちらかは明らかではない。

以下、名詞も動詞も具格で終止符にいたる。(一)は、梵文にはないが私意によつて区切ったところ。ここでは特に(一)を付けておいた。具格であるのは、さきの「ばがば」と *sardiam* (ともに)ランカーで時間を過ごすものこと述べるからである。*dhiksusamgha* (ピク団) *bodhisattvagana* (ボサツ群) はいずれも単数。この集団がランカーで時間を過ごすか、それぞれの成員が、同じ処からいっしょに来たのではない。*nana buddhaksetra* *samnipatitair* (種々の仏国土から来集した)。*samnipatitair* は複数だから、単数のピク団・ボサツ群にはかからず、次の *bodhisattvairmahatsattvaih* (諸ボサツ諸大士) を修飾する。宋・魏訳ではその点があいまいだが、漢文にはありがちなことである。*dhiksu* (ピク) は托鉢の修行者、のちに仏教で出家得度し具足戒を受けた男子をよぶ。*bodhisattva* (ボサツ) はたとりをもとめて修行する求道者で、在家・出家にかかわらぬ。*mahatsattva* はボサツの特にすぐれた者。*samnipatita* (来集した) は直訳すれば「飛びおりた」であつて、上方から飛来したことをさす。*nana* (種々の) *buddhaksetra* (仏国土) から。飛来したのは諸ボサツ・諸大士で、単数のボサツ群の成員をさすが、ピク団の成員については説明がなく、「飛来」した者からは除外すべきであろう。それならもたらランカーにいたか、「ばがば」について来たことになる。

仏国土とは仏の教えの及ぶ領域。一世界一仏という思想もあつたが、大乘仏教が起こつて、無数の仏と無量の仏国土が考えられるようになった。この「仏国土」に宋・魏訳は「他方の」という意の語をそえる。「種々」と「来集」の含む意を明確にするため析出した深切な訳語といえよう。「他方」に対する「この方」は、釈尊の領域、であり、具体的にはシャバ世界としてのインドとランカーである。シャバ世界だから、釈尊の領域・国土

といつても釈尊の教えに従わぬものもあり、単純に「この方」といいきれぬ複雑さがある。「他方」は、時間的には過去・未来の、空間的にはインド・ランカー以外の、そのほか、いわゆる「仏教」以外の覚者の領域をも含みうるだろう。このような領域・国土は、人間の分析・分類癖すなわち分別が作り出すものだが、分別につき動かされる人間のシャバ世界が、この経の発端である。

飛来した諸ボサツ・諸大士は、*aneka* (多く)の *samadhi* (三昧) *vasīta* (自在) *balābhi jñā* (神通の力) を *vikṛitair* (たのしんだ)。*aneka* は「一ではない」の意。インドでは肯定より否定の方が高い価値をあらわすから一ではないが「無量」と漢訳された。*samadhi* は、心を一つに集中させる心作用、その結果としての静安。三昧・三摩地は音写、定・受・等持・等念・現法樂住・調直定・正心行処・息慮凝心などと漢訳する。*vasīta* は、あらゆる現象の要因を制御する超自然力。*balābhi jñā* は超人的な智慧。*vikṛitā* は、完全に統御し、自由自在に活動し、それを喜び楽しむこと。奮迅・遊戯(遊化)などと訳し、魏訳は「奮迅遊化」とした。これらの能力は神秘的だが、他方の仏国土という神秘的な領域から飛来したボサツ達のものとするれば、ふしぎではない。

Mahāmātī bodhisattva (マハマトイ・ボサツ) を *pūrvagamaih* (リーダーとする)へボサツ達へは *sarva buddha* (一切の仏に) *panyahisekābhīśiktaiḥ* (手による灌頂を灌頂された)。*Mahāmātī* は、この経では、後に現われるラーヴァナに代って世尊に質問する立役者である。マハーは「大きい」マティは「智慧」だから「大慧」と漢訳される。マティは女性名詞、従つて *Mahāmātī* も女性である。文法上の性は自然の性とは一致しないが、文法上の性別が人間の観念を支配し、神話中の人物・神格の性別を決定する傾向の強いことを指摘する説がある。

ラーヴァナ *Ravana* は自然の性として男性であり文法上でも男性である。その対応、妙、といつてよいのではないか。マハーマティという名のボサツは、管見ながら、この経以外にはあまり現われないこと、法華経の上行等の四ボサツと似る。*Purvaṅgama* は「先行された」漢訳では「上首」とする。マハーマティをリーダーとするボサツ達、とは、他方仏土から飛来した諸ボサツ諸大士だろうか。梵文も漢訳三本も、そのように読め、古来そのように読んで来たようだ。しかし、經典全体の構造を考え、他の經典での「上首」の使われ方を参照すると、別の読み方を容れうる。この問題にかえると、他方仏土から飛来した諸ボサツ諸大士とは別に、マハーマティをリーダーとするボサツ達がいてかれらは：：と読みうる。このマハーマティをリーダーとするボサツ達を、わたしは前稿でランカー土着のボサツと見、いまでもその考えは誤っていないだろうと思う。もつとも、他方の仏土から飛来した諸ボサツ諸大士もまた、マハーマティをリーダーとして仰いだ、とすることは、わたしの解釈とも矛盾はしない。

灌頂（かんじょう）はもとインドの国王の即位や立太子のとき行つた儀式で、四大海の水を頭頂にそそぎ祝意をあらわす。『大史』第七章は「ヴィジャヤの灌頂」と題した。ヴィジャヤは、妻とした夜叉女のクヴァンナーと二人の子を去らせた後、マドゥラーラのバンドゥウ王の娘を迎えた。

大臣らは慣例に従つて、ことごとく来集し、ヴィジャヤを王位に即かしめて大祭を行つた。かくてヴィジャヤ王はバンドゥウ王の娘を王妃として、盛んな儀式をもつて灌頂した。

マハーマティの灌頂はこれに対応する。楞伽経の中にも教カ所で灌頂について説明する。

マハーマティよ、ボサツがこのように心・意・意識・五法・体相が一切の存在と離れたものであるから諸因縁も無だと観察するなら、これを諸法の無我を知る智の境界の相と名づける。マハーマティよ、ボサツが諸法の無我を知り、真如を観察し寂靜の行を修めたなら、まもなくへボサツのさとりへの第一段階である歎喜地に達するだろう。よくよく歎喜地を観察し了り、かくてへ第二、第三……と次第に諸地が明らかになりへ第十のへ法雲の地をさとることができる。ボサツが法雲地に止住すると、ありのままの行為と幻の境界から無量の諸宝をまじえて莊嚴した大宝宮殿が生じ、その大きな蓮華の形の王座にすわる。一切の同行の諸仏子に敬まいとりまかれ、十方の諸仏が手をのべて灌頂する、転輪王が太子に灌頂するように。へついでへ仏子地を訪い、仏子地を訪い了り、諸仏の法を観じ、如実に修行すれば、諸法中において自在となり、自在となり了ったのを如来の無上法身を得たと名づける。(集一切仏法品第三之二。大正16、五二八、上)

ボサツ大士は法雲地にいたり、大宝蓮華王宮殿の師子座の上にすわり、同類のボサツ大士一族にとりかこまれ、宝冠やようらくでその身を莊嚴し、ジャンブー樹林を流れる河底の砂金、チャンバカの花、日月の光明のように美しく蓮花の姿にまさる。そのとき十方の一切の諸仏はおのおのその手をのべ、はるかに蓮花王座上のボサツ大士の頭頂をなでる、得自在王、インドラ王、転輪王が太子に灌頂し位を授けるように。(同、

大正16、五三三、下)

後者によって「手による灌頂」とは、手で頭をなでるといふ形式の灌頂であることがわかる。二つの引用文も梵文と漢訳三本、さまざまに違いがあるが、大筋では変りなく、これによってマハーマティが次期法

王に選ばれたことが推定せられる。すると、この経そのものが、その資格試験の意味を帯びていることも知られる。そこで問題が出てくる。その試験は法王の太子の資格をとるためか、法王そのものになる試験かという問題が。魏訳が「而授位」というのは法王そのものの資格を証明したことになる。宋・唐訳も梵文もそこがはっきりせず、どうやら太子の資格ととっているらしい。いずれがよいかは、追いかけて明らかになるだろう。

sva (自らの) citta (心) が dr̥śya (見々々) gocara (対象領域) の artha (意義) を kṣalair (々々) pari-jñāna (々々) / nāna (種々の) sattva (衆生) の citta (心) の caritra (々々これは安井氏の校訂により vicitra とす) まで、それならく多様な) rūpa (形態) と naya (態度) と vinaya (訓練) を dharibhīh (身につける)。

宋訳は、前にもいったように梵文とほとんど一致する。その宋訳の「無量度門。随類普現」にあたる梵文は、naya vinaya dharibhīh で、あまりにも違いすぎる。魏訳の「無量度門。随所応度。随所応見。而為普現」はことばは多くなっているが趣旨は同じ。唐訳の「方便調伏」は梵文と合うが、このあたりの文章全体はひきちぎって勝手につなぎ合せたような感じがする。ここは宋・魏訳の方向でなければ、はなはだしく意義が滅殺する。そのことは、次の句をすませてから触れよう。

pañcadharmā (五つの法) と svabhāva (固有のありかた、自性) と vijñāna (識別) と nairātmyadvaya (二種の無我) に gatiṅgataih (精通した)。

魏訳の「五法門品第十二」は、そのすべてが右の文章の注釈といつてよい。ここでは必要な部分だけ引く。

五法とは何か。一は名(nāman) 二は相(gimittā) 三は分別(vikalpa) 四は正智(samyagjñāna) 五は真如

(tathata)である。これを内身に修行すれば、聖人の智をさとり、断・常の誤った見解を離れる。この如実の修行を実現する者は三昧の楽しみとサマーパッティ (samāpatti・平等) の門に入る。マハーマティよ、一切の凡夫は五法・体相 (自性) ・二種無我を覚知せず、ただ自心をもって外物を見る。だから分別の心が生じるので、聖人といえないのだ。(大正16、五五七、中)

この「注釈」もそこに出てくる一々のことばを注釈しなければわからないと思うが、その機会はすぐやってくるだろう。とりあえず、五法・自性・識へ魏訳には欠ける、二種無我の学習修行が仏・如来となるための前提条件であることがわかればいい。ところで魏訳の「無量度門。随所応度。随所応見。而為普現」宋訳の「無量度門。随類普現」はその学習修行が完成し、すなわち仏・如来となって実現するものであるだろう。すなわち到達した仏位の境地を示すものであろう。「五法門品」の、右に引いた前後の文、さらにこの経の随所に見える文章がこれを支持する。その道筋を正確に表現しているのは、魏訳だけで、宋・唐訳はもとより梵文も、ともに混乱している。梵文・宋訳は、それでも解釈の仕方である筋道はたどれるが、唐訳は無茶苦茶だ。

これまでの説明を整理すると、五法・自性・二種無我を学習したマハーマティが、その成果をあげて、「がば」に質問し、「がば」はこれに答えることによつてマハーマティの境地を証明し、他方の仏土から来集し見学した諸ボサツの報告によつて、一切の仏国土の仏たちから承認の手による灌頂がさしのべられた。それだけの時間的展開が、圧縮して述べられている。

ここで疑問が出るかもしれない。もしマハーマティだけが灌頂されたのなら、諸動詞の複数であるのは合わぬで

はないか、と。問いは、マハーマテイが複数であれば直ちに解消する。「問答品第二」のはじめに、

そのとき、聖者のマハーマテイ・ボサツはもろもろの一切のマハーマテイ・ボサツとともに一切の諸仏の国土に遊び：：（大正16、五一九、上）

このところを宋訳は「大慧ボサツは摩帝ボサツとともに」とし、唐訳は「大慧ボサツ大士は摩帝ボサツとともに」とする。これを読む中国人や日本人には「大慧ボサツ」と「摩帝ボサツ」は別のボサツとしか受けとれなかつたろう。梵本には、

Atha khalu Mahāmatirbodhisattvomasasattvo Mahāmātibodhisattva sahitah sarvabuddhaksetrānucārī...とあり、「そのとき実にマハーマテイ・ボサツ大士はマハーマテイ・ボサツとともに一切の仏国土にゆき：：」の意で魏訳は極めて正確である。マハーマテイは、単数のボサツではなく、マハーマテイ・ボサツ大士をリーダーとするマハーマテイ・ボサツ達であつた。

このことは、はなはだ分りにくい見え、鈴木大拙氏は正直に理解しかねると告白し「摩訶不思議」といった。宋訳のグナパドラもおそらく同様で「摩帝」は苦しまぎれの処置だつた。分らぬものを分らぬとするのはやむをえぬ。宋・魏訳をきびしく批評し、ことに魏訳にサンスクリットの音写が多いと非難した唐訳が、ここで「摩帝」と音写ですませているのはどうしたことだろう。鈴木氏の研究・翻訳からほとんど半世紀たった今日でも、なおこの解釈については進まず、ある注釈家は宋・唐訳の「摩帝」にあたる梵文の Mahāmati を誤りとして削り、他の注釈家は「摩帝」(摩訶慧、知覚の意)。この菩薩名はここにだけ現われる。登場の必然性はよく判らない。

といい梵本を参照しない。もつとも、南条氏の校注によれば、前頁の梵文の、前の Mahamati を、チベット訳には Maiti とし、後の Mahamati のない梵本もあるというから、さきの注家はそちらを尊重したのであろう。しかし、チベット訳も現存梵本も唐訳より後のものだから、魏訳より確かだとはいえず、またそれに拠って経意が明らかにならなければ、採るべき理由はない。

マハーマティ・ボサツ大士が、一切のマハーマティ・ボサツと、すべての仏国土に行ったのはなぜか。それはマハーマティの灌頂に諸仏とその国土のボサツ達を勧請したのだ。「問答品」は前にいったように「請仏品」と同時進行していて、「問答品」のマハーマティの勧請のための訪問の結果として、「請仏品」の仏国土からのボサツ群の飛来となった。ボサツが来れば仏も来ている消息はボディールチの訳した『勝思惟梵天所問經』の第一巻によって知られる。また、マハーマティ・ボサツ達がランカー土着のボサツであることは「集一切仏法品第三之一」の次の文で察知しうる。

そのとき、聖者マハーマティ・ボサツ大士はまた仏に言った。どうぞ世尊よ、もろもろのボサツ大士のためにお説きください、心・意・意識・五法・自体の法門を、諸仏・ボサツが修行し、自身の誤った見解から構成された対象領域を離れ、一切の言語・譬喩・自性から離れ、一切の諸仏の教えの中心であるものを。ランカー城・マライヤ山・大海中の諸ボサツのためにお説きください、アラヤ識の大海の波のような対象領域の観察法を、法身如来の説かれた法を。(大正16、五二三、上)

この「ランカー……」のところは梵文では、

となっていて「マラヤのランカー城に居住するボサツ達や人人のために大海の……」の意。nādhī (大海) が、マラヤにかかるか後の tarāṅga (波) にかかると見るかの問題はあがあるが、ランカーに nivāsino (居住) する、ボサツ達のためにと云っていることは間違いない。動詞 vas は、ある場所に留まることで、一時的な滞在をもさすがは (中に) という副詞がつけば長時間の居住に傾く。マハーマテイの世尊への説法の請求は、ランカー土着のボサツや住民のためであることは、ほとんど疑いない。でなければ、ランカーに諸仏・諸ボサツを招く必要はないのだから。ではなぜランカーの人々のためにか。マハーマテイ自身がランカーの居住者であり、ランカーの人々のリーダーだったからだ。

ここでもとにもどって、宋・魏訳が *raha* (種々の) 仏土になぜ「他方」の語を加えたかを、もう一度考えてみよう。それはランカーで行われる「灌頂」の意義を明らかにするため、そこに参加した者にも、そこに住む者と他から来る者があることを、はっきりさせておきたかったのであろう。種々のは内包を示す概念だが、その外延は一切である。そこから「他方」を除けば残るものは「この方」である。「この方」は「ランカー」であった。「他方」はこの経で名を与えられていない。そこから来たボサツ達にも名は与えられていない。名が与えられているのは「マハーマテイ」だけであった。それなら名の与えられている「マハーマテイ」は「この方」の者であることは当然であり、「この方」の者はことわらなくても「この方」のものにきまっている、というのが中国での表現の常識だから、ボディールチは、飛来したボサツには「他方」とことわり、マハーマテイに対しては「こ

の方」とことわらなかつた。魏訳は、その論理性をつらぬくために、あるいは梵文の語順のあいまいなものは、翻訳にあたって変更することも敢てしたかもしれぬ。宋訳は現存梵本とつきあわずと、いわゆる「直本」といつてよいほどその語順を追っているように見える。しかし「請仏品」の大部分を省略したことにも察せられるように、この経の構造、論理の骨格を充分につかんでいとはいへぬ。唐訳は唐代の仏教学によつてこの経を裁断しようとするもので、この経の内面に素直に入ろうとするものではない。それがこの経の冒頭の短い一節の翻訳にもまざまざと現われている。マハーマティがランカーのボサツであることは、ポディールチにはわかりきつたことであつたに違いない。だからかれから見れば宋訳のグナパドラにも同じようにわかつていたのだという信頼があり、グナパドラの省略の實際の事情も察せられ、同情しつつ、しかしわたしはきちんと筋を通して訳しておく、ということだったのであろう。

あるひとにとってわかりきつたものが、他のひとにとってどれほどわかりにくいものであることか。それをわたしは、この経を読みながら痛感し、日常の人や物とのつきあいでも痛感する。

それを思うと注釈という作業の空しさを嘆きたくなるが、だからこそまた、くだくだしい注釈をしておくことで同じ誤ちをくりかえさぬ捨て石を沈めることになるのかもしれない。

梵本を引きあいに出してあれこれ述べたが、サンスクリットについてのわたしの知識は無いに等しく、漢訳経典もまた正しく読んでいるかどうか、覺つかない。誤ちを示教されるよう、かさねて願ひする。

(一九八五年七月二十五日)

前号の「私の好きな詩」に対し、さまざまのお励ましやお教えをいただいた。

ある方はご自身の描かれた絵はがきに『私も「いちようとぐみ」の詩が好きです』といってくださいました。

ある方は電話で「メダカの群れの中でうろうろしている身にはキビシイいませぬ」とおっしゃった。これは道子の「好き」な詩のひとつ、緒方昇「鬼三戒」についてのご感想である。同じ詩につき、別の方が手紙で「「鬼三戒」はまことに至言であります 敢えて 戒というところに意があるのであって：：孤行に流されるだけの小生にとって 敢えて これを 私の自戒といえます」といってくださいしたのは、「自戒」という謙虚な立場を通して「人界を離れて孤立する」ことを高しとすることの危険をお教えくださったのであろう。

また別の方は、世界身体障害芸術家協会の絵はがきに「小鬼離人界 大鬼離人界 * 離、麗也。 「方向」42号がありがとうございました。道子さんによくお伝え下さい。」とお書きくださった。

「*離、麗也」は、「この離は、同じ音の麗の意味で使っている」ということで、麗をリとよむ場合は、たとえば『易経』の「麗沢」（りたく）のように「ならぶ」、さらにたがいに助けあってりつばになるというほどの意味をもつ。だから「小鬼離人界 大鬼離人界」は「小鬼は人界をはなれ、大鬼は人界とならぶ」とよみ、ケチな鬼は人間世界にソッポをむくが、ゴツイ鬼は人間世界をはなれず、人間と手をとりあって、鬼の世界も人間の世界も、要するにすべての世界が美しくなるために努力する、というのであろう。これは、まことに、わたしにとっても、若い道子にとっても、適切なありがたい示教であった。ともに厚く感謝いたします。（8月26日、憲）